神奈川県立保健福祉大学誌　第21巻第１号（2024年）63 － 72
https://doi.org/10.15042/0002000043

報告

地域在住高齢者参加型の高齢者看護学演習プログラムの実践報告
―高齢者の参加を促進する環境づくり―

A Report on Gerontological Nursing Practice Program with Participation of Community Dwelling Elderly
―Creating an Environment that Promotes the Participation of the Elderly―

黒河内仙奈[1)]*，星　美鈴[1)]，間瀬由記[1)]
１）神奈川県立保健福祉大学保健福祉学部看護学科
Kana Kurokochi[1)]，Misuzu Hoshi[1)]，Yuki Mase[1)]
１）Kanagawa University of Human Services, Faculty of Health & Social Services, School of Nursing

抄　録

【研究目的】看護学科２年次科目「高齢者看護学Ⅰ」のヘルスアセスメント演習プログラムが地域在住高齢者の参加を促進する募集・運営であるかの評価を行い、高齢者の参加を促進するための環境づくりについて今後の課題を検討する。

【研究方法】2023年６月から７月に、高齢者看護学Ⅰのヘルスアセスメント演習に協力者として参加した地域在住高齢者23名が演習終了後に回答した無記名自記式アンケートの調査結果を分析対象とした。

【結果・考察】研究者から各地域在住高齢者へ個別に依頼したことが参加のきっかけとなった割合が最も高かった。また、半数以上が「学生の役に立ちたい」という思いから参加に至っていた。地域在住高齢者が演習プログラムに参加しやすい案内や準備、当日の運営を行った結果、高齢者の特徴に合わせた説明が演習内容の理解につながっており、演習協力者の参加意欲や高い満足につながった。一方で、高齢者自身が、演習への協力が学生の役に立ったと実感できる仕組みや、今後の継続した参加の促進に向けた協力者の名簿の管理や問い合わせ窓口の設置といった組織的なシステムの構築が課題である。

キーワード：高齢者の社会参加、高齢者看護学演習、参加促進
Key Words：Social Participation of the Elderly, Gerontological Nursing Practice, Enhanced Participation

Ⅰ．背景

核家族化により、看護学生が日常生活の中で高齢者に触れる機会は少ないため、臨地実習前に実際の高齢者を対象に、リアリティのある演習を体験することは、実際の臨地実習をイメージできることにつながる[1)]。一方、超高齢社会において、高齢者の社会参加を促進することは、健康寿命延伸に向けたフレイル対策としての効果があり[2)]、高齢者にとっても有益であるといえる。2023年度に看護２年次生が履修する高齢者看護学Ⅰでは、地域在住高齢者が協力者として参加する演習プログラムを実施した。その中で、高齢者の社会参加の促進という観点から、

著者連絡先：*黒河内仙奈
神奈川県立保健福祉大学保健福祉学部看護学科
E-mail：kurokochi-mgv@kuhs.ac.jp
（受付　2023.9.5　／　受理　2023.11.22）

プログラムの実施に向けて、先行研究を参考に高齢者が演習プログラムに参加しやすい案内や準備、当日の運営を行ったことの評価と、地域在住高齢者が看護学演習に参加しやすい環境づくりの今後の課題を検討したためここに報告する。地域在住高齢者が協力者として演習に参加しやすい環境をつくることで、高齢者の社会参加の機会の提供および参加を促進するとともに、学生と高齢者の世代間交流を図ることが期待できる。

Ⅱ．研究目的

本研究の目的は、看護学科２年次科目「高齢者看護学Ⅰ」のヘルスアセスメント演習プログラムに演習協力者として参加した地域在住高齢者に行った事後アンケートの結果から、地域在住高齢者の参加を促進する募集・運営であったかの評価を行い、高齢者の参加を促進するための環境づくりについて今後の課題を検討することである。

Ⅲ．演習プログラムの概要

１．演習目標の設定

本学は看護学科２年次の前期に高齢者看護学Ⅰ（１単位）を開講しており、2023年度より、授業時間数が８コマから15コマに増えたことで、このうちの２コマをヘルスアセスメント演習にすることを決めた。演習の目的を「地域で生活する高齢者とのコミュニケーションを通じて、高齢者の長い生活歴を知ることで、高齢者の生きてきた過程・社会背景を知り、高齢者の考え方･価値観などを知るとともに、高齢者の健康状態および健康維持増進への取り組み方の特徴を知る。さらに、振り返りにより学生自身のコミュニケーションにおける課題を明確にする」とした。また、当該学生は、１年次後期（12月）に基礎看護学実習Ⅰを履修し、２年次前期（９月）に基礎看護学実習Ⅱを控えている。本演習の目的を設定する際、両実習の間に位置づくことがわかるよう各実習目標との整合を図った（表１）。その結果、本演習の目標を次のように決定した。１）高齢者に関する身体・精神・社会的な特徴について説明できる、２）高齢者の健康状態をアセスメントする方法を理解できる、３）高齢者の健康状態をアセスメン

表１　ヘルスアセスメント演習の目標設定

<table>
<tr><th>基礎看護学実習Ⅰ
（1年次後期：12月）</th><th>ヘルスアセスメント演習
（2年次前期：6-7月）</th><th>基礎看護学実習Ⅱ
（2年次前期：9月）</th></tr>
<tr><td>患者が生活している一人の人間であることを理解する</td><td>高齢者に関する身体・精神・社会的な特徴について説明できる（事前学習）</td><td rowspan="4">患者を受け持ち、生理的心理的社会的統合体として全体像を理解する</td></tr>
<tr><td rowspan="3">患者の療養環境を知り、患者の生活に及ぼす影響を考える</td><td>高齢者の健康状態をアセスメントする方法を理解できる（事前学習）</td></tr>
<tr><td>高齢者の健康状態をアセスメントできる（演習）</td></tr>
<tr><td>加齢に伴う身体的変化が高齢者の生活に与える影響について説明できる（演習）</td></tr>
<tr><td>患者と自分の関係が相互に影響し合うことに気づく</td><td rowspan="3">高齢者とのコミュニケーションスキル・態度について理解し、実践できる（演習）</td><td>患者とのかかわりを通し、援助的人間関係を構築する</td></tr>
<tr><td>その人に合った看護技術のあり方を考えることができる</td><td rowspan="2">実習全体において看護学生としての自覚を持ち、誠実な態度で学ぶ</td></tr>
<tr><td>看護学生として誠意ある態度が取れる</td></tr>
<tr><td>患者を中心として機能する看護師と他職種の役割を知る</td><td>（設定なし）</td><td>患者の安全・安楽を考慮した上で、現在展開されている看護援助の一部を実施する</td></tr>
</table>

トできる、４）加齢に伴う身体的変化が高齢者の生活に与える影響について説明できる、５）高齢者とのコミュニケーションスキル･態度について理解し、実践できる。

２．演習の進め方

⑴事前学習

高齢者の健康状態のアセスメント方法および、自己紹介の仕方や質問の仕方、話の聴き方について調べることを事前課題とした。学生は､「栄養」「排泄」「清潔」「活動」「コミュニケーション」「環境」「社会参加」「その他」の側面から、健康状態のアセスメントに必要な情報を得るための具体的な質問と質問の順番についてワークシートを用いて整理した。

⑵演習の内容

学生グループ２～３人で、地域在住高齢者１名を受け持つこととした。受け持ち高齢者に対して、役割の決定や挨拶・自己紹介・発言の順番などを決めるグループでの作戦会議と面接を各２回実施し、高齢者との面接で得られた内容から、各グループで対象者の強みと健康課題をICF（International Classification of Functioning, Disability and Health, 国際生活機能分類）の枠組みを用いて整理した。地域在住高齢者からフィードバックを受け、面接における態度について振り返り、自身のコミュニケーションおける課題を明確にすることとした（表２）。

⑶演習における教員の役割

教員は、面接中の各部屋の巡回、会話が止まっているグループへの声かけ、作戦会議での相談への対応、グループ発表でのコメント・意味づけ、時間管理、面接環境・態度の確認を行った。

３．演習協力者の募集に向けた準備と実施における配慮

⑴高齢者の演習参加に関する文献検討

高齢者に対する演習への参加募集・運営に必要な事柄・配慮を検討するために、文献データベース医学中央雑誌Web（以下、医中誌）を用い、文献検討を行った。検索対象は2000年以降とし、「高齢者」「演習」「参加」をキーワードとした論文29編が該当した。さらに「高齢者」「演習」「ボランティア」は９編､「地域住民」「ボランティア」は５編であった。このうち、総説、高齢者が演習に参加していないもの、民間機関での養成を受けたSP（Simulated Patient；模擬患者）の参加による演習を扱った論文を除いた10編[3～12]を分析の対象とした（表３）。

演習協力者が演習に参加した経緯は、「大学から募集した近隣住民」が３件と最も多く、ついで「研究者・所属機関と関わりがある人」が２件、健康サロンなど「地域活動グループからの紹介」が２件であった。演習協力者への説明について、事前に資料を郵送していたのは４件であり、事前に対面での説明会や学習会を開催していたのは３件であった。

表２　ヘルスアセスメント演習のスケジュール

実施内容
・出席確認・演習内容の説明（5分）
・各面接室へ移動・環境調整（5分）
・グループでの作戦会議（1回目）（20分）
・面接（1回目）（30分）※終了後、学生が高齢者を控室へ案内
・1回目の面接の振り返りと2回目の面接に向けた作戦会議（2回目）（20分）
ー休憩ー
・面接（2回目）（40分）
・高齢者から学生へのフィードバック（20分）　※終了後、学生が高齢者を控室へ案内
・2回目の面接の振り返りと情報の整理・考察（20分）
・移動・グループ発表（20分）

表３　分析の対象とした論文

著者名	論文タイトル	演習内容	参加者の概要	参加者の呼称	参加の募集方法	事前準備
黒澤ら（2021）	高齢模擬患者参加型演習に参加した1年次看護学生のコミュニケーションに関する8ヵ月後の認識	看護1年次学生が、学生同士のロールプレイ（1グループ6名）を行い、看護におけるコミュニケーションスキルを用いて、学生に設定したシナリオにて、学生同士ロールプレイと振り返りを3回実施。2コマ目は、高齢SPとの看護面接を高齢SPがグループを移動して4回繰り返す。1週間の間隔を開け、2回の演習を実施。	50～70代の一般市民が演じる高齢模擬患者	高齢模擬患者	記載なし	協力の得られた50～70代の一般市民のSP15名（男性2名，女性13名）に対し、事前準備として、SP養成者が①シナリオの理解、②演技の練習、③フィードバックの練習を各2時間行った。
鹿島ら（2014）	高齢者SP(Simulated Patient)養成の課題	看護2年次生の「老年看護方法論」において、高齢者SPが学生8～12名で構成するグループの代表者1名とのセッションを実施。7分間のセッションおよび3分間のフィードバックを1セットとし2セット実施	熊取町在住で、SPに関心のある65歳以上の男女で、SP養成講座の履修者	模擬患者	既に著者の所属機関と関わりのある方に直接依頼	演習目的・目標および方法について説明を受け、講座にて学んだことを振り返りながら準備し、臨んだ。
橋本ら（2017）	認知症高齢者理解とコミュニケーション技術習得のための体験演習における看護学生の学び	看護学生（3年次）は4～5人の小グループに分かれ，認知症高齢者1人と自由に会話し，教員，グループホーム職員のサポートを受ながらのコミュニケーションをグループに分かれて（1グループ31人）実施。回想法は30分と短時間で実施し，コミュニケーションをとる時間を15分，1グループの演習時間を合計45分に設定。	グループホーム入所中の認知症高齢者	なし（認知症高齢者本人）	記載なし	大学に招き，学内の教室で実施した
小薬ら（2014）	一般住民ボランティアによる模擬患者(Simulated Patient)参加の基礎看護技術演習における学生の学び	基礎看護技術Ⅱの技術演習として、「3 日前に発熱と食欲不振で入院した患者」の事例を学生に提示し、患者役として一般住民ボランティアによる SPを導入。	保健センターで地域の健康促進活動に参加している一般住民	模擬患者	保健センターで地域の健康促進活動に参加している一般住民を対象に SP を募集	事前に SP の役割についてのオリエンテーションと学習会に参加してもらった。事例内容については、SP に共通理解が得られるよう事前に説明を行った。
造田ら（2017）	高齢者教育ボランティアを導入したフィジカルアセスメント演習の教育効果	学生は４人１グループに分かれ，各グループに高齢者教育ボランティア１人を配置。事前に学習した高齢者に対するフィジカルアセスメント(PA)内容に沿って，学生が１人ずつPAを実践。実践者以外の学生は観察者とし，実践が終わるごとに高齢者教育ボランティアおよび観察者からフィードバックを行う。	研究者の主催する健康教室に参加する 65 歳以上の地域住民（応募者のほとんどは，以前にも本学で行った高齢者コミュニケーション演習においてボランティアを経験者）	高齢者教育ボランティア	研究者の主催する健康教室で、演習の目的や内容，教員がサポートを行う旨を記載した応募用紙を配布し，20 人程度の募集を行った．男女は問わず，高齢者教育ボランティアが休憩できるようにグループ数よりも多い 15 人を選定した。	・演習前に演習内容，目的，予測される事項，休憩時間を設け体調不良時には中止も可能であることを口頭と文書にて具体的に説明 ・演習当日は教員のデモンストレーションに同席を依頼し，患者役のイメージ化を図る ・患者役を経験した率直な感想を学生に伝えるよう依頼 ・高齢者教育ボランティアが学生の学びを共有できるように，可能な範囲で学生の発表への同席を依頼
玉田ら（2014）	地域住民ボランティアが参加する看護技術演習の意義　地域住民の思いと効果	学生12～13名のグループに対して1名のボランティアが患者役として参加し、グループの代表学生が行う看護援助を受け、その後、グループ学生全員と意見交換を行う。	大学が近隣住民に対して行った募集に対して、自主的に応募、登録している者	地域住民ボランティア	登録者には、毎年年度初めに年間授業予定と各授業でのボランティア内容を案内し、その中から協力可能な授業に参加してもらっている。募集の際の参加条件は特に設けられていない。	参加するボランティアに対しては、演習内容に応じて教員が作成した患者役の設定とシナリオを予め郵送しておき、演習当日に30分程度の教員との打ち合わせを行うが、特別な講習会やトレーニングは行っていない。
小泉ら（2014）	地域の高齢者ボランティアを導入した高齢者のヘルスアセスメント演習の評価	“ふれあい・いきいきサロン”が開催されている公民館に出向き、看護学生（3年次）１名につき高齢者ボランティア１名により、ヘルスアセスメントを実施。学生は、演習時間40分でシナリオに沿って進め、観察および問診で聴取した内容を高齢者のヘルスアセスメントシートに記録する。	月1回開催される“ふれあい・いきいきサロン”の参加者	高齢者ボランティア	“ふれあい・いきいきサロン”の代表者に演習の主旨や内容等を文書と口頭で説明したうえで協力を依頼し承諾を得て、月１回開催されるサロンの企画として参加者を募った。（参加者は58名、年齢は70～83歳、男性７名、女性51名）	事前打ち合わせで、企画委員会に参加して演習方法や演習時の協力内容を説明し、当日の運営や会場設営を検討した。 高齢者ボランティアには、１ヶ月前に演習方法や協力内容の説明を行った。
梶谷ら（2020）	フィジカルアセスメント演習における看護学部1年生の学び　地域住民教育ボランティアとの関わりを通して	学生は事前学習を行い、演習当日は、模擬患者１名に学生２～３名がグループとなって担当し、60分間で問診やバイタルサイン測定を行い、演習後には得られた情報を統合して対象者の健康状態をアセスメントする。	記載なし	地域住民教育ボランティア	事前に模擬患者に、演習の目的や方法、１年生が習得している看護技術項目の大まかな内容、演習の事前学習の状況等について伝え参加者を募る。具体的な募集方法は記載なし。	事前に模擬患者に、演習の目的や方法、１年生が習得している看護技術項目の大まかな内容、演習の事前学習の状況等について伝える
宇多ら（2014）	地域住民による教育ボランティアを導入した看護演習の効果　生活者を支える在宅ケアのイメージを高めるために	在宅ケア論「演習」に教育ボランティアを導入したロールプレイ演習。学生9人のグループ3組で1空間とし、ファシリテーターの教員と療養者・その介護者を演じる教育ボランティア夫婦1組を配置。学生グループは、退院翌日・退院2週目・退院3週目を担当したグループをそれぞれ1組（計3組）で構成。1場面につき1グループの代表が看護師を演じ、同グループの学生は看護師役のサポートや観察者、時には他のグループからの質問に対して、グループによる訪問看護計画のプレゼンテーションを実施。	殆どが模擬患者役として数回の経験を持ち、在宅介護に興味・関心のある高齢夫婦	教育ボランティア	大学が募集した「地域住民による教育ボランティアど導入したカリキュラム」（2007～2009年、現代GP（地域活性化への貢献＜地元型＞）事業）に協力・参加する登録者の中から、演習の目的と演じていただく内容（受ける看護行為）を説明し、夫婦での協力・参加を募った。	事前に事例と演じる内容（シナリオ）を送付し、演習当日に、視聴覚教材を使用しながら具体的に説明した。また、実際の場面では、「学生の対応（姿勢や態度を含めて）を、納得し受け入れる気持ちになればケアに応じる」ことと、場面毎のディスカッションでは、「ケアを受けての率直な感想」をお願いした。
江川ら（2011）	看護大学における地域住民ボランティアを導入した授業の評価　学生の感想・意見から	大学で教育ボランティアを導入した7科目（1年次科目（看護技術演習Ⅰ、看護技術演習Ⅱ、健康生活支援学概論、老年健康生活支援論、小児健康生活支援Ⅰ）、2年次科目（看護技術演習Ⅲ）、3年次科目（健康生活支援技術演習））の概要	地域における行事や、大学での他の現代GP活動およびセミナーなどに参加した住民	教育ボランティア	全科目共通で、地域における行事や、大学での他の現代GP活動およびセミナーなどに参加した住民に直接依頼し、ボランティア登録申込書を用いて受け付けた。	各科目で事前準備として、内容の説明を行い、事前説明に参加できない人には郵送と電話で説明していた。

これらのことから、大学からの募集や研究者や所属機関との関係が地域住民の参加につながっていたことが明らかとなった。さらに、演習当日の説明に加え、事前の丁寧な説明が演習協力者の準備に必要であることを示していた。

⑵演習協力者の募集・参加における配慮

大学の近隣住民に向けた募集に加え、過去に本学の他の演習科目で参加経験のある地域在住高齢者に対して、個別に募集チラシを郵送し協力の依頼をした。先行研究[13]により、高齢者がボランティアに参加できるための支援として、「求めるボランティア内容や手続きに関する情報を住民が受け取ることができる丁寧な周知」「興味を持ってもらい、ボランティアにつなぐための動機付けの工夫」「短時間でも参加が可能となる柔軟な活動内容の検討と場所の確保」「住民と支援者との関係性の構築とともに参加への不安の解消・経済的負担の軽減ができる相談の仕組みづくり」「参加することの社会的評価や承認の制度・仕組みづくり」が課題であることが明らかになった。そのため、前述の文献検討の成果と統合し、地域在住高齢者への演習協力の依頼方法を決定した。募集チラシを作成するにあたり、「看護学生のコミュニケーションや血圧測定のトレーニングをする相手役になってくださる方を募集している」のように、依頼したい役割を明記し、1日のみでも参加可能なこと、特別な資格は必要ないことを明記することで、高齢者に「自分にもできるかもしれない」と思ってもらえるような配慮をした（表４）。

Ⅲ．研究方法

１．研究対象者

高齢者看護学Ⅰのヘルスアセスメント演習プログラムに演習協力者として参加した地域在住高齢者23名が、演習終了後に回答した無記名自記式アンケートの調査結果を分析対象とした。

２．調査方法・内容

内容は、基本属性（性別、年齢など）、参加動機、演習協力者の募集を知ったきっかけに加え、５段階評定で、①演習協力の依頼・当日の案内についてのわかりやすさ（１．十分わかりやすかったから５．非常にわかりづらかった）、②演習参加への満足度（１．満足から５．不満）、③今後の演習協力への意欲（１．ぜひ協力したいから５．協力したくない）、④質問①②③の評価の理由および演習に対する感想・要望については自由記述で回答を求めた。

３．データ収集期間

データ収集は、演習を実施した2023年６～７月に行った。

４．分析方法

定量的データは、設問ごとに記述統計量を算出し、定性的データは、記述内容の類似性や相違性を検討して整理した。これらの結果から、ヘルスアセスメント演習において地域在住高齢者の参加を促進する募集・運営であったかの評価を行い、高齢者の参加を促進するための環境づくりについて今後の課題を検討した。

５．倫理的配慮

演習協力者へ演習後日に報告書を送付する際、アンケートの結果の分析にあたり、個人は特定されないこと、データの取扱いは十分に配慮した上で本誌に投稿する旨を書面にて説明した。

Ⅳ．結果

⑴研究対象者の概要（表５）

対象者は男性12名（52.2%）、女性７名（30.4%）、無回答４名(17.4%)の合計23名であった。このうち、２日間の演習のうち、両日ともに参加したのは10名であった。年代は65～69歳が6名（26.1%）と最も多く、次いで75～79歳と80～84歳が各5名（21.7%）であった。74歳以下の前期高齢者は10名（43.5%）、75歳以上の後期高齢者は13名（56.5%）であった。このうち、夫婦での参加は4組であった。

⑵参加のきっかけと動機

演習協力者の参加のきっかけとなったのは、「（募集）チラシが送られてきた」が11名（47.8%）と研究者から各地域在住高齢者へ個別に依頼したことが

表 4　演習参加を促進するための実施内容と意図

高齢者ボランティア支援の課題	実施内容	実施の意図
求めるボランティア内容や手続きに関する情報を住民が受け取ることができる丁寧な周知	**募集方法** 大学への演習経験者には個別に郵送 研究者が担当した生涯学習講義での周知 行政センターを通じて、自治会・町内会へのチラシ配布の依頼	顔が見える環境・顔なじみの関係者に直接協力依頼をすることで安心感を持ってもらうため
	参加申込方法 申込方法を電話、郵送、FAX、メールのいずれかとする	高齢者がアクセスしやすい媒体での申込方法にすることで、参加へのハードルを下げるため
短時間でも参加が可能となる柔軟な活動内容の検討と場所の確保	**募集案内への掲載内容** 1日のみでも参加可能なことを明記 特別な資格が必要ないことを明記	「自分にもできそうだ」と思ってもらうことで参加につなげるため
興味を持ってもらい、ボランティアにつなぐための動機付けの工夫	**演習内容の記載** 看護学生のコミュニケーションや血圧測定のトレーニングをする相手役になってくださる方を募集していることを明記	演習内容に関心を持ってもらうため
	成果のフィードバック 事後報告書を送付	「自分が協力が学生の役に立った」と実感してもらうことで、次の参加につなげるため
住民と支援者との関係性の構築とともに参加への不安の解消・経済的負担の軽減ができる相談の仕組みづくり	**質問・懸念への対応** 問い合わせ先の連絡先を明記 事前に、演習内容、タイムスケジュールを掲載した案内状を送付	心積もりをすることで、不安なく参加してもらうため
	当日の説明内容 演習概要、学生のレディネス、学生へのフィードバックの方法	丁寧に説明をすることで理解につなげ、安心感を持って参加してもらうため
	担ってもらいたい内容を箇条書きで端的に資料に明記	参加者の特徴に合わせた説明をすることで、理解につなげるため
	会場準備 面接に使用する部屋と控室の移動は、教員または学生が誘導する 大学入り口の守衛室・事務局に、事前に演習参加者が来場することを伝える 構内入口から控室までのルート案内を掲示 洗面所近くに控室を確保する	不安な思いを抱かず、迷わずに移動ができるようにするため
参加することの社会的評価や承認の制度・仕組みづくり	参加証の発行	実績を可視化することで、今後の参加意欲の継続につながるため

参加のきっかけとなった件数が最も多く、次いで「自治会･町内会からの連絡」が 4 名（17.4%）であった。

参加動機は、「学生の役に立ちたいと思ったから」12名（52.2%）、「学生と触れ合う機会を持ちたいと思ったから」11名（47.8%）であり、約半数が学生のための演習であることに関心を持つことが参加に

表５　研究対象者の概要（ｎ＝23）

		人数	（%）			人数	（%）
性別	男性	12	(52.2)	参加動機（複数回答）	どんなことをするのか演習内容に興味があったから	9	(39.1)
	女性	7	(30.4)		おもしろそうだったから	3	(13.0)
	無回答	4	(17.4)		学生と触れ合う機会を持ちたいと思ったから	11	(47.8)
年代	60~64歳	1	(4.3)		学生の役に立ちたいと思ったから	12	(52.2)
	65~69歳	6	(26.1)		自分のためになると思ったから	8	(34.8)
	70~74歳	3	(13.0)		以前から大学・教員とつながりがあったから	3	(13.0)
	75~79歳	5	(21.7)	依頼・当日の案内について	十分わかりやすかった	12	(52.2)
	80~84歳	5	(21.7)		わかりやすかった	10	(43.5)
	85歳以上	3	(13.0)		普通	0	(0.0)
職業	会社員	1	(4.3)		わかりにくかった	1	(4.3)
	公務員	0	(0.0)		非常にわかりにくかった	0	(0.0)
	自営業	1	(4.3)	演習参加への満足度	満足	16	(69.6)
	パート	1	(4.3)		まあ満足	7	(30.4)
	無職	19	(82.6)		普通	0	(0.0)
	その他	1	(4.3)		やや不満	0	(0.0)
参加のきっかけ	チラシが送られてきた	11	(47.8)		不満	0	(0.0)
	自治会・町内会からの連絡	4	(17.4)	今後の演習協力への意欲	ぜひ協力したい	15	(65.2)
	住まい周辺の掲示板を見た	2	(8.7)		タイミングが合えば協力したい	8	(34.8)
	家族から誘われた	2	(8.7)		内容によって協力したい	0	(0.0)
	知人から誘われた	3	(13.0)		どちらとも言えない	0	(0.0)
	その他	1	(4.3)		協力したくない	0	(0.0)

つながっていた。

⑶演習協力への依頼・説明のわかりやすさ

表３の内容に基づいて、演習協力の募集や当日の案内を行った結果、「十分わかりやすかった」12名（52.2%）、「わかりやすかった」10名（43.5%）であった。自由記載でも、「*話す口調がゆっくりで繰り返しで良かった*」「*丁寧な説明だったので理解できた*」との回答であり、高齢者の特徴に合わせた説明が演習内容の理解につながっていた。また、「*（案内状に）タイムスケジュールの記載があったので大変良かった*」との意見があり、見通しがあることで演習協力者の安心につながっていた。さらに、「*守衛室の方が（演習協力者の）顔を見て演習協力者だと気づき、エレベーターの方向まで指示して下さりわかりやすかった*」と、迎える環境を整えることも演習協力者の安心につながっていた。一方、「わかりにくかった」と回答した演習協力者からは、「*予め（学生からの）質問事項を（演習協力者に）知らせることを勧める*」との意見であった。

⑷演習参加への満足度

演習参加への全体の満足度について、「満足」16名（69.6%）、「まあ満足」７名（30.4%）と全員が満足を示す回答であった。満足の理由として、「*若い生徒さんにお会いできて楽しかったです*」「*楽しくお話しさせて頂きました*」「*常に笑顔で接していただきうれしかったです*」と＜学生との触れ合いへの喜び＞を感じていた。また、「*学生さんの熱心さに驚いた*」「*学生がハキハキとしてよくメモを取っていた*」「*学生が丁寧だった*」「*笑顔で話をきいている姿を嬉しく思いました*」と＜学生の態度・熱心さへの感心＞についての意見もあった。「*目的にそった回答ができたと判断した*」と演習協力者が＜自身の役割発揮を実感＞できたことも満足につながっており、「*若い方を育成するこの様な企画がよかった。保健福祉に携わる若い方の育成には協力したい*」と＜演習の企画へ賛同＞する意見も得られた。一方で、「満足」との回答ではあるが、「*私達の応対はいかがでしたでしょうか？*」「*学生さんの質問に答えたが、必要としている答えを得られていたでしょうか？*」と自身の対応への評価についての意見もあった。

⑸今後の演習参加への意欲

今後、このような演習を実施する際の演習協力の

意向について、「ぜひ協力したい」15名（65.2%）、「タイミングが合えば協力したい」8名（34.8%）であり、全員が前向きに協力の意向を示す結果であった。

今後の参加意欲について、「*とても楽しかったです。学生さんのお役に立てるのであればこれからも参加したいと思いました*」と今回の経験を＜楽しく感じた＞ことや、「*学生さんの学ぼうとする心で眼がキラキラしてました。私にとっても良い学びでした*」「*気持ちが若返って良かったです*」と＜自分のためになった＞と感じたことが、次への参加意欲につながっていた。また、「*大学の前を何年も通っていたが初めて構内を歩かせていただき立派な構内を知りました。生徒さんたちと楽しく交流でき、いい思い出が出来ました*」「*学校の様子や生徒の礼儀の良さはすばらしかった*」「*学生食堂で実際に食事をさせていただきとてもおいしかったので感謝しております。今後もこのような機会は利用させていただきたく思います*」と演習参加が＜大学を知る機会＞となり、今後も参加しても良いという思いに至っていた。

一方で、参加意欲を示した上で、「*マスク越しの会話なので私自身も難聴気味なため、発声が聞き取りづらく、もう少し声が大きいと助かった*」「*質問の目的をできるだけ明確にした方がよいと思いました*」と今後の改善点を示唆する意見が聞かれた。さらに、「*丁寧な案内でしたが、元気な老人は案内を省略することがあっても良いかと思います*」「*参加証明書はいりません*」と今回の参加促進への配慮を過分に感じた演習協力者からの意見も挙がった。

Ⅴ．考察

1．地域在住高齢者が参加しやすい演習協力の募集および参加における配慮の評価

看護2年次生の高齢者看護学Ⅰにおいて、地域在住高齢者が協力者として参加する演習プログラムを実施した。先行研究を参考に、高齢者が演習プログラムに参加しやすい案内や準備、当日の運営を行った結果、演習協力者から高い満足と参加意欲を得ることができた。

参加募集については、多くが顔の見える環境での依頼、あるいは顔なじみの関係者に直接依頼することで、高齢者の演習参加への承諾を得ることができた。近年、オレオレ詐欺や還付金等詐欺等による高齢者の被害割合の増加が顕著であると言われており、2019年の特殊詐欺の被害者のうち、高齢者が83.7%を占めている[14]。このような状況であるがゆえに、高齢者が外部からの案内や連絡に対して非常に警戒していることが想像できるため、顔が見える関係あるいは大学という公的機関からの連絡によって、高齢者が安心して参加できることにつながる。新規協力者の確保に向けた課題は、今後も地域住民向けのイベントや高齢者と接する機会など、折に触れ、住民参加型の演習等の大学の取り組みを紹介することであり、これにより高齢者が大学の演習に関心を寄せ、安心して参加できると考える。

約半数が学生のための演習であることに関心を持つことが参加につながっていた。演習協力者の反応から、今回の演習が高齢者の役割発揮や「楽しさ」などの情緒的交流の場、「気持ちが若返った」という活力源になったことが伺えた。内閣府の調査でも、若い世代との交流の機会への参加意向をみると、「積極的に参加したい」は3.4%、「できるかぎり参加したい」は32.7%であり、約3人に1人は『参加したい』と回答しており[15]、参加募集の際に、この演習への参加は、看護学生のコミュニケーションや看護技術の相手役をすることであることを明記したことは、高齢者の参加意欲につながったと考える。

また、演習内容やタイムスケジュールを記載した案内状や当日の説明に対する評価も高かった。学習や計算、記憶、短時間での情報処理、新しいことに対する処理能力等に必要な流動性知能は、30歳をピークとして、65歳以降は比較的早く低下する[16]。そのため、演習当日のみの説明ではなく、事前に演習内容を知らせることやゆっくり話すといった高齢者の特性に合わせた説明が演習協力者の満足につながったと評価する。

今回の演習協力者の反応で、「自分の学生への対応はこれで良かったのか？」と自身の対応への評価についての意見があった。今回のアンケートは、演習の実施直後に行ったため、事後報告書の送付といった成果のフィードバックについての評価は含まれておらず、このような演習協力者の反応であったことが考えられる。バンデューラは、自分自身が経

験した成功である「遂行行動の達成」によって、自己効力感が高まると述べている[17]。つまり、参加による成功体験によって達成感を感じることが「自分にもできた」「次も参加してみよう」という思いにつながる。そのため、成果のフィードバックは、高齢者自身が、演習への協力は学生の役に立ったと実感できる仕組みとして有効であると考えるが、全体的なフィードバックだけでなく、演習協力者個々へのフィードバックや承認についても検討が必要である。

演習協力者への配慮について、案内を省略しても良いといった声や参加証明書は不要との意見も聞かれた。今回の演習は初めての試みであったため、細かく丁寧な説明に努めたが、２回目以降の演習協力者に対する説明や対応については今後の課題である。

２．地域在住高齢者の参加を促進する環境づくりにおける今後の課題

先行研究[18] [19]の報告にもあるように、演習に参加する高齢者は、過去に模擬患者あるいはボランティア経験を有していることが多い。今回の演習でも、研究者や大学と関係のある高齢者への勧誘が最も参加につながっており、経験者に継続してもらうことが演習協力者の安定した確保につながる。高齢者の社会参加が、健康寿命の延伸に向けたフレイル対策に効果があり[20]、今後も演習参加といった高齢者の社会参加の機会が増えることは望ましい。江川ら[21]が大学全体で協力者を募集したように、高齢者看護学領域に限らず、領域横断的に高齢者の参加の機会を増やし、参加してもらうためには、名簿の管理や演習協力者が本学の演習等のプログラムに継続して参加していることがわかるような管理システムの構築を要する。

また、今回は筆者を演習協力者からの問い合わせ窓口としたが、継続して領域横断的に、授業科目ごとに協力者を募る場合は、科目ごとに問い合わせ先が異なることが予測される。地域住民が安心して、混乱なく問い合わせができる環境とするには、上記の管理システムの構築と同様に、大学で受付窓口を設けるといった組織的な仕組みが必要である。

さらに、ボランティアへの近年の新規参加者が多くなく、ボランティアが過去からの継続的な参加者に支えられ、次代の中核となるべき層が育成されにくい[22]という現状があるため、高齢者の継続的な参加を支援しつつ、新規の地域在住高齢者が参加しやすい募集案内、対応を検討していくことが今後の課題である。

Ⅵ．結論

看護２年次生の高齢者看護学Ⅰにおいて、地域在住高齢者が演習プログラムに参加しやすい案内や準備、当日の運営を行った結果、演習協力者の参加意欲や高い満足につながった一方で、今後の継続した参加の促進には、協力者の名簿の管理や問い合わせ窓口の設置といった組織的なシステムの構築が課題である。

Ⅶ．謝辞

初めての試みである本演習について、ご協力くださった地域住民の皆様、ならびに参加募集において広報活動にご尽力くださった自治会長、町内会長の皆様に深く感謝申し上げます。

Ⅷ．研究の資金源および利益相反

本研究は本学の2022年度地域貢献研究センター研究事業助成金により実施した。なお、本研究による利益相反はない。

引用文献

１）古村美津代，木室知子，中島洋子．老年看護学教育における疑似患者導入の臨時実習への影響．老年看護学．2009；13（2）：80-86.
２）竹内寛貴，井手一茂，林尊弘，他．高齢者の社会参加とフレイルとの関連：JAGES2016-2019縦断研究．日本公衆衛生雑誌．2023；70(9)：529-543．doi.org/10.11236/jph.22-088
３）黒澤昌洋，山本恵美子，山中真，他．高齢模擬患者参加型演習に参加した１年次看護学生のコミュニケーションに関する８ヵ月後の認識．愛

知医科大学看護学部紀要　2021；20：19-29.
4）鹿島英子，吉村牧子，吉本和樹，他．高齢者SP（Simulated Patient）養成の課題．関西医療大学紀要　2014；8：20-26.
5）橋本智江，小泉由美，岩本陽子，他．認知症高齢者理解とコミュニケーション技術習得のための体験演習における看護学生の学び．日本認知症ケア学会誌　2017；15（4）：848-856.
6）小薬祐子，志田久美子，長谷川ゆり子，他．一般住民ボランティアによる模擬患者(Simulated Patient）参加の基礎看護技術演習における学生の学び．帝京科学大学紀要　2014；10：163-170.
7）造田亮子，段亜梅．高齢者教育ボランティアを導入したフィジカルアセスメント演習の教育効果．老年看護学　2017；22（1）：131-138.
8）玉田雅美，澁谷幸，池田清子，他．地域住民ボランティアが参加する看護技術演習の意義　地域住民の思いと効果．神戸市看護大学紀要　2014；18：29-38.
9）小泉由美，橋本智江．地域の高齢者ボランティアを導入した高齢者のヘルスアセスメント演習の評価．看護実践学会誌　2014；26（1）：82-92.
10）梶谷佳子，岡田純子，中橋苗代，他．フィジカルアセスメント演習における看護学部1年生の学び　地域住民教育ボランティアとの関わりを通して．京都橘大学研究紀要　2020；46：109-121.
11）宇多みどり，成瀬和子．地域住民による教育ボランティアを導入した看護演習の効果　生活者を支える在宅ケアのイメージを高めるために．日本看護学教育学会誌　2014；24（1）：79-88.
12）江川幸二，グレッグ美鈴，沼本教子，他．看護大学における地域住民ボランティアを導入した授業の評価　学生の感想・意見から．神戸市看護大学紀要　2011；15：57-66.
13）黒河内仙奈，間瀬由記，末田千恵．高齢者ボランティア活動に関する成人・高齢者を対象とした基礎調査：混合研究法による課題の検討．神奈川県立保健福祉大学誌．2023；20（1）：49-60.
14）警察庁（『令和2年版　警察白書』https://www.npa.go.jp/hakusyo/r02/index.html（最終確認日：2023年9月5日）
15）内閣府「令和3年度 高齢者の日常生活・地域社会への参加に関する調査結果」．8．世代間の交流・生きがいhttps://www8.cao.go.jp/kourei/ishiki/r03/zentai/pdf/2_8.pdf（最終確認日：2023年9月5日）
16）神﨑恒一．Ⅵ．加齢に伴う認知機能の低下と認知症．日本内科学会雑誌．2018：107(12): 2461-2468．https://doi.org/10.2169/naika.107.2461
17）アルバート・バンデューラ編（1997）本明寛・野口京子監訳「激動社会の中の自己効力」東京：金子書房，1997.
18）前掲6
19）前掲10
20）前掲2
21）前掲11
22）全国社会福祉協議会（2010）『全国ボランティア活動実態調査報告書』https://scb43a48fd0a99fa2.jimcontent.com/download/version/1332996660/module/5714270058/name/DD_08111830482620.pdf（最終確認日：2023年9月5日）